

---

fall ~ coda ~ autumn

井能枝傘葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

f a l l \ c o d a \ a u t u m n

### 【NZコード】

N 9 5 2 5 W

### 【作者名】

井能枝傘葉

### 【あらすじ】

秋はいろいろある。食欲、スポーツ、芸術、読書。人それぞれ様々な秋。

彼が選ぶのは、どの秋だろうか？

ナント力の秋…………… 秋、と言つた方が良いだらうか？  
とりあえず、そういうものがあるのは「ご存知だらう」。

食欲の秋、スポーツの秋、芸術の秋、読者の秋、等々々。  
それが何故あるか、何故そう呼ばれているか、「ご存知だらう」か？

俺は、知らない。

ただ、こつ考えた事がある。

春は桜舞う中、入学、あるいは卒業、出会いの嬉しさや別れの悲しさが交差する。そんな季節。

夏は口が伸びて暑く、太陽きらめく夏休みに楽しみや忙しさの混じる。そんな季節。

冬は雪降る寒い日々に、年末と年始、新しさへの慌ただしさ溢れる。そんな季節。

では、秋はどうだらう。

夏のように暑くも、冬のように寒くもない、虫や動物が冬ごもりの為、春よりも行動が分かりやすくなる。

つまり、何かをするにはついついつけの季節。

しかし、暦で考えれば秋は立秋の8月8日から立冬の11月8日まで、8月はまだ夏だし、11月も冬の方が近いだろう。

9月23日の秋分は、まあ秋だろう。

その秋と呼ばれる8～11月の3ヶ月、学校では運動会や学園祭がある……

そう、秋は基本的に気候が良くて、暇が多いのだ。

この先に冬に寒くて動きたくなくなる、ならその前に色々な事をしよう。そう思った人々が、様々なことをして、その秋の名を作ったのだと、俺は思う。

人それぞれ、自分の秋がある……

……俺には、どの秋が一番合つか?

## prologue（後書き）

始まりました。秋の物語、falling codas autumn  
プロローグを語る彼は、これからおこる出来事を、この時はまだ知  
らない。

そしてそれを知った時、彼が選択するのは、自分の秋を探すこと……  
定期的に更新できるよう努力いたしますので、願わくば応援のほど  
を。

それでは、

ところ所で、目が覚めた。

「ん……？」

いや、正確には起こされたようだ。机の上で、電話着信のメロディを流す携帯に。

「つたく……誰だよこんな朝早く」

時計を見ると、セットしたアラームにはまだ20分くらい早い時間だ。電話が鳴らなけりやまだ後20分は寝てられたのに、と思いながらまだ鳴り続ける携帯を取り、ディスプレイの発信者を見た。

「……竜華か」

名前を確認してから着信ボタンを押した。

「ふあい？」

まだ眠気の残ったまま変な返事をする。

『なんだ、その妙な返事は？』

案の定指摘された。

「これに起こされたからだよ、普通ならまだ寝てるからな」

『普通なら、だろ？ だが忘れてないか？ 今日お前がなんなのか』

今日？ ……ああ。

「そうか、今日田直だつたな」

しかししつづく日直の決め方がおかしいよな。小中学校では出席番号とか席順だつたが、まさか前日に引いたくじで決めるとか。4日連続してくる奴とかいたし。

『日直だつたな、ではない。田直だから早く行くのだらう。それなのになぜいつも時間に行こうとしていたんだ』

あーそうだった。日直は日誌を担任からもらつたりとか色々な仕事があつて、先生が来る前に終わらせないといけないから早く教室に行く必要があるんだ。

竜華はそれを知つて（普通は知つて）俺を迎えてくれたの

か。

『起きたなら早く支度しろ、あまり遅いと先に行ってしまつた』

「へーい」

ぶつちやけ言えば、先に行かせて任せちゃいたいが……後で何言わ  
れるか分からぬからな……

あの竜華の事だ。眞面目にやつておいてから、俺が反論出来ないと  
分かつて正論で怒つてくるだろう。

「さすがに、それはカンベンだな」

俺は布団から出ると、制服に着替え始めた。

学生寮の自分の部屋の扉に鍵をかけ、俺は寮の入り口に早足で向か  
つた。

扉を開けて外に出ると、

「来たか、思つていたより早かつたな」

壁に寄りかかっていた竜華を見つけた。

黒に瑠璃色を溶かしたような濃い青に見える髪を後ろでポニー<sup>テー</sup>  
ルにまとめ、学校指定の冬制服に身を包み、学生鞄を肩にかけてい

た竜華は、壁から背を離して俺を正面に見た。

青川竜華。<sup>あおかわりゅうか</sup>俺とは小学生からの知り合いで、幼なじみといつやつだ。

いや、小学校の6年、中学の3年と、偶然同じになつた高校の3年  
の今に至るまで同じクラスになり続けているから、幼なじみという  
より腐れ縁と言つべきかもしけない。

「さつさと行くぞ」

俺を見るなり、竜華は背を向けて学校へ歩き出した。俺は隣に行つ  
て並んで歩く。

「それにして、ずいぶん寒くなつたよな

まだ秋と呼ばれる月だが、田舎へ近づく今日、肌に当たる風は冷たく、寒かつた。

「だらしないな、今そんな事を言つていたら冬を越えられないぞ」呆れたところ風に竜華は肩を落としため息をついた。なんというか、竜華の俺に対する態度の方が若干冷たい気がした。

まあ、中学くらいから急にこうなつたが、もう慣れた。

「そんな事言つたつて寒いもんは寒い、これは冬休みには冬眠するしかないな」

「そんなの私が許さないぞ、冬休みは毎朝叩き起こしてやる」「め、め、め……」

冬眠とまでは言わないが、冬休みは睡眠時間を増やすと思つてたんだが。

竜華がいつ宣言したら、忘れない限り必ず実行する。つまりのままでは冬休みに毎朝叩き起しあれるはめになんとか忘れてくれないものか……

「あ

寒いと言えば。

「どうかしたのか？」

「竜華」

「だからどうした？」

「ありがとな、わざわざ寒い中迎えに来てくれて」

その瞬間、

「な!?」

目を丸くした竜華の顔が赤くなつた。この寒い中、逆に暑そうだ。

「な、なにを言つているんだ彰！ 私はただ、お前が日直をサボらないように来ただけに過ぎない！ か、勘違いはするな！」

いきなり叫んだ竜華は真っ赤な顔のまますたと歩を速めて行つてしまつた。

「な、何だ？」

何で竜華の奴怒つてんだ？ 俺はただ、この寒い中待たせて悪かつ

たな、つて詫びただけなんだが。

そりやまあ、竜華の言つ通り俺がサボらないよつになんだろうが、女子寮つて男子寮より学校に近くて、来ると必然的に学校への遠回りになるのを竜華が知らないわけないんだけどな。それに、そもそも電話なら寮の前へ来る必要は無いはず。

じゃあ、何で竜華は俺を迎えて……？

「彰！ なにをしている、早く行くぞー！」

だいぶ前に行く竜華に呼ばれた。

「……ま、いいか」

考えたところで答えは出ないだろうしな。

もう一度呼ばれる前に、俺は竜華の後を追つた。

## 1st day ? (後書き)

まずは主人公と、その幼なじみをご紹介。  
あれ？ そういえば主人公の名前出てない  
つ、次には必ず出できますよ……多分。  
…………?  
…………?

それでは、

## 1st day ?

俺の名前は、彰。

多分『あきら』と読みたくなるだらつ、もしかしたらそれが普通の読み方だから仕方ない。

けど、これの読みは『あき』。俺の本名は、みどりはあき绿葉彰。

始めて俺の名前を文字で見た人は、ほぼ100%間違える。なので最近は半場諦めたりする。

まあ、竜華を始めとした友達はちゃんと呼んでくれるし、先生は苗字呼ぶからあんまり悩んでないけど。でも……秋生まれというだけでこの名前をつけるのはどうなんだ両親？

などと考えてる間に学校へと到着。職員室に行つて担任から日誌を貰い、俺たちの教室 3-Dへ。

扉を開けて中に入ると、すでに何人かクラスメイトが来ていた。別に日直だからって一番に来る必要は無い。ただ先生が来る前に黒板の掃除とかしておけば良いだけだからな。

「おーっす彰、日直、くろうだな」

俺を見つけた晴斗が声をかけてきた。

本人曰く染めたらしいが、よく見たいと分からぬこげ茶色のショートカットに、黒縁のメガネをかけている。

コイツの名前は藍田陽斗。あいだ はやと俺の友達で、『出席番号は一番以外なつたことがないぜ！』と、どうでもいい事を自慢してくる奴だ。

「ん？ 今何か失礼なことかんがえなかつたか？」

そして妙にするどい奴もある。

「いや別に、おはよう陽斗」

俺の後から入ってきた竜華にも、他のクラスメイトから声がかけられた。

「りゅーちゃんおはよー」

セミロングの髪を頭の左右でおさげにしている、明るい茶髪の女子。

彼女の名前は山吹奈津保。やまぶきなつほ 言わずもがな、竜華の友達だ。

「ああ、おはよう奈津保」

竜華も挨拶を返す。

「あき君もおはよー」

続いて山吹は俺にも挨拶。俺が返すと、鞄を席に置きに行く竜華についていき、俺も自分の席に一一番後ろの窓から三列目、つまり真ん中。先生の目が届き難そうな届き易そうな場所へ鞄を置き、椅子に座った。

「そういう彰、知ってるか？」

陽斗が隣の席に座りながら訪ねてくる。

多分、言いたいことは分かつた。

「転校生の話か？ しかもこのクラスに」

「なんだ、知つてたのか」

「俺今日日直だそ？ さっき田誌貴<sup>たじき</sup>ってきた時に先生に聞いたよ

「そういうやうだな、で、どう思ひ?」

「何がだ？」

「転校生だよ。男か女か、彰はどうちだと想いつ？」

「あー……」

そこまでは言わなかつたからな先生。性別は分からないが……

「席は、そこだろうな」

陽斗の座つている席を指さした。

実はそこ、陽斗の席じゃない。だが指定された誰かの席というわけでもない。少なくとも今は。

ここは俺達が3年生になる時、転校して行つてしまつた生徒の席。席替えの度ここはそのまで、現在隣は俺となつている。それが今日、埋まるようだな。

「いやそれはわかつてるからさ、男と女、どうちだと想いつ？」

陽斗は再度同じ質問をしてきた。

「ふむ……」

どついたせよ隣の席で今日日直だから俺が世話役になるだろつ。と

なれば、なるべく話しやすい人が良いよな……まあ、基本的に誰とでも話せるけど。趣味らしい趣味もなく、色々な知識を広く浅く持つ俺は、大方の話題に首を突っ込めるという変わり者スキルを持つている。

「とりあえず、好きなものを聞いてその話で盛り上がるだろ?」  
転校生への接し方は、これで良し。

「いやいや、あのな彰?」

陽斗が怪訝そうな顔を向けてきた。

「オレが言つてること伝わってるよな?」

「分かってるよ、ちょっとした冗談だ。転校生の性別だろ?」

しかし、確率50%とは言え、難しいよな。

「何なら、久々に賭けるか?」

「お、良いね、負けたら昼休み購買ダッシュな

「OK、で、どうする?」

「そうだな……」

その時、

「彰

不意に竜華に呼ばれた。見れば席に前に立っている。その隣には山吹がいる。

「まだ黒板を掃除しないぞ」

「へーい」

やれやれと席を立ち、黒板の前へ、黒板消しを持って縦に拭いていく。右側から俺、左側から竜華だ。

「ナツはどうちだと思う?」

「う~ん……」

ついてきた陽斗と山吹は教卓の前で転校生について話していた。  
ちなみに、陽斗は山吹を「ナツ」と呼び。山吹は陽斗を「ハル」と呼ぶ。この二人もまた、俺と竜華のように幼なじみなんだ。

「じゃあわたしは女の子! ハルくんは男の子ね」

二人の間でも賭けが発生したらしい。

「ねえねえ、りゅーちゃんはびつちだと思つへ。」

「ん？ そうだな……」

手を止めぬまま竜華は考える。そしてちょうど黒板を拭き終えたところで、

「では、私は男に賭けてみよつ」と言った。

これで、数により俺は必然的に女を選ぶことになった。

チャイムが鳴り、HRの時間となつた。

皆珍しく自分の席に戻り、そしてさらに珍しく静かに、担任、とうより転校生の登場を待つた。

3分後、教室の扉が開いて、担任の谷門先生が入ってきた。今年教職6年目の男性教師、科目は体育だ。

「何だ？ 妙に静かだな」

教室内を見て、雰囲気に気づいたらしい。

「やはりあの噂はもう聞いてるらしいな、田直が話したか？」

その前から知つてましたよー。という生徒の声を聴いて、先生は教卓に荷物を置くと、チョークを一本持つた。

「じゃあ要望を叶えてやるか、入つてくれ」

先生が呼ぶと、教室の扉が開いて、一人の生徒が入ってきた。瞬間、ざわざわと教室内が騒がしくなつた。声は全部、転校生について。

腰まで届くほどに長い、軽いウェーブのかかった茶髪。前の学校の物だろう、この学校のとは違う制服。

深緑色のブレザーに、チェックのスカート。転校生は女子だった。

「じゃあ朱井、自己紹介しや」

「はい」

黒板に名前を書いた先生に言われた転校生は、深く息を吸い、「本日、一九九三年D組転校してきました、朱井雀耶あかいさくやです。皆さん、どうぞよろしくおねがいします」

言い切つて深く一礼した。

クラスメイトは各自に「よろじゅー」とか、「かわいい」等感想を言っている。

「朱井の席はそこの、緑葉と南野の間な」

「はい」

クラスメイトの視線を集めながら席がある最後尾へ。

「よろしくお願ひします」

右隣になる南野から順に律儀に反時計回りに隣接する4人に挨拶していく。

そして俺の番になった。

「よろしくお願ひします」

「ああ、よろしく」

そこでようやく自分の席に座った。

「今日日直の青川と緑葉は朱井の世話を頼むぞ。特に緑葉、席が隣だから教科書とか見せてやれ」

「へーい」

やはり予想通りになり、返事をする。

「というわけでさ、教科書が揃つまでは俺か、そっちの南野のから見せてもらってくれ」

「はい、ありがとうございます。緑葉さん」

「呼び捨てで良いよ、その方が話しやすいだろ」ぱっと見、敬語とか慣れてそうだけど、同じ年にさん付けはどうもむずがゆい。

「そ、そんな、呼び捨てなんて出来ませんよ」

やつぱり、敬語に慣らされ過ぎてるのか。

「別に良いくて、むしろ俺的にはそっちの方が助かるんだけど」

「え、えっと……」

しばらく考えて、

「で、では……緑葉……くん」

そうきたか。でも十分な進歩だよな。

「よろしく、朱井さん」

「雀耶、で構いませんよ」

「じゃあ、よろしく。雀耶さん」

「はー」

雀耶さんは嬉しそうにうつと笑った。

## 1st day ? (後書き)

この物語は、自分の作品『僕と記憶とメガネと精霊と』の終わりから一年後の同じ学校の話となっています。なのであつさりとその時の人物が出てきたりします。今回も名前が出てきました。ご存じの方は、おお、と思ってください。

それでは、

雀耶さんに教科書を見せる。それ以外特に変わった事もなく、一時限目が終了した。

先生が挨拶すると同時に、あるいはそれより早く、待つてましたと言わんばかりにクラスメイト達が席を立ち、雀耶さんの席の回りに集まつた。

転校生に対しての、質問攻めだ。

「うへえ、なんとか逃げれたな」

席が隣な為に一時限会場前に話をしていた俺や、南野といった隣人は自分の中にもあの集合ざつとクラスの三分の二くらいか

に入っていないのも何人かい。俺達5人とか、話しかけられないだろうと思つた数人や寝てる人、日誌を書いている竜華とか。

だがその人達も視線は（寝てる人を除いて）向けていたのに、コイツは唯一前を向いていた。

俺は声をかけつつ、隣の席へ向かつた。  
「よつす黒石、お前は行かないのか？」  
黒石は顔を上げて俺を見る。  
青がかつた黒髪のショートカット、その髪と似た青がかつた目の男

子。  
黒石曜、それがコイツの名前だ。

「そんな事言つたつてよ、あの中に入るの無理だつて器用にペンを指で回しながら答えた。

「てことは、興味はあるんだな」

「当たり前だ。ただ、あの数と……コレ書いてたからだ」黒石は机の上のノートを俺に渡した。陽斗の席に座つてノートに田を落とすと、

「うわっ、何だよコレ」

そこには文字や記号がびっしりと書かれていた。文字は英語っぽく、記号は妙に五角形が多く見える。

子供の落書き、或いは精密機械の設計図のように見える。「んー、企画書、つてのが一番近い呼び方か」

企画書……といふことは。

「また、何かやる気なのか？」

黒石とは高校で出会つた。一年生から同じクラスになり会話もしたが、黒石は基本的には別クラスの生徒と共に行動して、人助けなるものを行つていた。

俺は助けてもらつたことは無いが、本当に困つている生徒や先生を助けていたのだから凄い。

ただ、二年生のある日、メンバーの一人が交通事故にあつてからと、いうもの、ぱつたりと辞めてしまった。そして3年生になった黒石は、事あるごとに様々な仕掛けでサプライズをするようになつた。人助けしていた方から、逆に困らせる、或いは楽しませる方にだ。その主催者側に、俺や陽斗といったD組男子が入つていたことも多少なりある。そしてこの企画書はまた何か、多分雀耶さんへの何かだろう、だとしたらぜひ俺も手伝いたいところだ。

「どうだらうな、分からん」

黒石はペンを止め、背もたれに体を預けた。

「え？ こんだけ書いといて何もしないのか？」

ノートをペラペラと捲る。64ページある小さなノートの半分以上を黒石にしか分からない暗号で書いてある。読めはしないが、きっと

と練られた何ががびつしり書かれているんだろう。

「やりたくはあるんだがな、どうも人物の数とか、細かい所が決まらないんだ」

「数合わせなら、俺や陽斗がなるぞ?」

「そりやありがたいが、それでも後1人……いや、2人くらい欲しいか

「じゃあ、誰か声かけるか?」

「ふむ……」

黒石は少し考え、

「……いや、いいや、昼休みに心当たりに会つてくるから

「そうか、もし何かするなら言つてくれよ。力になるから」

「サンキューな、縁葉」

その時、チャイムが鳴った。集まっていたクラスメイト達が戻つていったので、俺も自分の席へ戻つた。

「遅いね~、二人共

「そうだな」

時刻は既に昼休み、俺と山吹は転校生性別当ての賭けによつて、外れた竜華と陽斗を待つていた。

「購買が混んでるのは分かるけど、にしても時間かかるものだ。

「そうだね~、やっぱり注文しない方が良かつたかな」

注文すれば、それを買う為に普通より時間はかかるものだ。

ちなみに、雀耶さんは数人のクラスメイトと一緒に昼食を取つてゐる。俺達も別にそこへ入れば良いだろうが、まさか賭けをしていたとは言えない為、少し離れた陽斗の方へ集まつていた。黒石は

休み時間に言つていった心当たりに会いに言つたのか、不在だ。  
しかし……遅いな。

かれこれ何分待つてゐるか、確認の為に携帯を開いた。  
瞬間、着メロが流れた。

「おお？」

絶妙なタイミングに驚きながらも発信者を確認。陽斗だつた。

「何してんだ、アイツ」「着信ボタンを押して出る。

「どうした？」

『あ、彰か？』

「当たり前だろ、俺の携帯だぞ」

『だよな』

「で、どうした？」

『今さ、昼飯がそつちに走つてつたから、ジャッジよろしくな  
ジャッジ？ 走つてつた？』「……ああ、そういうことか」

『という訳で、頼んだぞ』通話が切れた。

「ハルくん、なんだつて？」

携帯を終いながら伝える。

「竜と虎が全力疾走してくるつて、昼飯持つて」

「え？ ……あ～」

納得した山吹はうんうんと頷いた。

普通は分からぬが、つまりそういうことなんだ。

その時、

ガラガラパーン！

「いよっしゃああ！ アタシの勝ちだあ！」

扉を力いっぱい開けて大声と共に、1人の生徒が教室に入ってきた。

「え、え、何ですか？」

朱井さんがそれを見て驚いていたが、

「大丈夫、たまにあることだから」

隣に座っていた生徒に心配無いと言われてとりあえず落ち着いたようだ。

アッシュグレー ほのかに黄色みを帯びた灰色 のボサツ  
としたショートカットの女子生徒は教室内を見回し、俺達を見つけて近寄ってきた。

アイツの名前は、白本紀虎しらもと きじゅ。

本人はB組だが、あるいは理由があつてよくD組に来ている。

「よつ、待たせたな二人とも」

右手をひらひらと振り、左手に購買のビニール袋を持つて俺達の所へ。

「お前を待つてたつもりはないんだがな」「つれないなあ、んなこと言うなって」

気にせず顔で俺の前の席に座った。

「というか、竜華はどうした?」

と言った瞬間、

「紀虎！」

入り口から竜華が早足にかけて來た。

「へへ、今回はアタシの勝ちだな」

紀虎がD組に来る理由は、竜華だ。

一年生、まだ紀虎と同じクラスだった時、二人は何かにつけて勝負をしていた。全部を見ているわけではないので詳しい勝敗数は知らないが、二人は両極端に得手不得手が分かれている。

紀虎は体力型で、100M走や幅跳びのような陸上系が得意。

一方竜華は技能型、バスケやテニスといった道具を扱つたりチームプレイを必要とする競技が得意だ。

今回は多分、購買からここまでレース。単純な走りなら紀虎に分があつたのだろう。

だが、それにしても差があり過ぎるよつた。

「当たり前だ！　途中で大菊先生に注意されていたのだからな！」

そういうことか。

「運も実力の内つてやつだな」

「それだけじやない、これを見ろ！」

竜華が突き出したのはビニール袋、購買で買ったものが入つていて、

「あ」

「あー！」

俺と山吹の声が被つた。

袋の中身は山吹がリクエストしたパンと、瓶牛乳が入つていて。あれを持つたまま走れば、衝撃で瓶が割れてしまうかもしない。しかし竜華は慎重に持つてきて遅れてしまつたのだろう。

だが、それでも走つて来た為に瓶がパンを潰していた。

「わたしのパン～！」と嘆く山吹の隣で、紀虎はけらけらと笑つた。  
「それも運だつて、アタシは袋の中身を知らなかつたんだから、竜華がそつちを渡せばよかつたのにさ」

いや、竜華は分かつても渡さなかつたな。

紀虎があの袋を持つて走れば、瓶は必ず割れて、袋のパンは全滅していただ。それを避けるために竜華はあの袋を渡さなかつただろう。おそらく、勝負自体もする気はなかつたんだろうが、紀虎が袋を奪つて走りだしたから仕方なく後を追い。大菊先生に見つかってしまった。という所だろう。

だが、紀虎がそんなこと知る筈もなく。

「まーいいじょんじょん、そんなことより昼飯食おーぜ、時間無くなむ」

自分の持つてきた袋をひっくり返して机の上にパンをぶちまけた。  
走つてきた為、所々形がいびつだ。

「すまない奈津保……注意はしていたのだが……」

「だいじょうだよりゅーちゃん、わたし形は気にしないから  
先ほど嘆いていた山吹も竜華からパンを受け取つた。

「んじゃ、いただきまーす

紀虎は机に広がったパンを一つとつて封を開け食べ始めた。

そういえば、俺の昼飯もこの中にあるんだよな。

「彰も早く食えよ、無くなるぞ?」

「あ、ちょ、待てよ」

紀虎とパンの取り合いをしながら、騒がしい昼食をとったのだった。

結果、紀虎と取り合ってパンを全て平らげた為、遅れてきた陽斗はロターンすることになった。

## 1st day ? (後書き)

この物語には、さりと自分の別作品の人物が出てきます。しかも、かなりのキー・マンで。

誰か、までは言いませんがここまで読んだ方ならお分かりでしょう。この人物がどんな奴なのかは、その別作品を読んでいただければ分かります。

それでは、

## 1st day ?

午後の授業が終了し、放課後となつた。

俺が黒板に書かれた文字を消していると、

「彰、お前も日誌を書け、残りは私がやつておく」

竜華が日誌を持ってきた。黒板消しと交換に日誌と鉛筆を受け取り、教卓の上で日誌を開いた。

日誌には今日の感想を簡潔に書けば良いのだが、さすがは竜華、細かく書いてある。

さて、俺は何て書くか。

「緑葉くん、青川さん」

と、そこへ雀耶さんが鞄を持ってやって來た。

「どうしたの？」

「谷門先生に放課後来るよう言われまして、お一人も行かれますよね？」

「ああ、じゃあ一緒に行こうか

「はい」

雀耶さんは微笑んで答えた。

そうと決まれば、さっさと日誌を書いてしまつて……

「…………ん？」

ふと、視線を上げて前を見た。そこで、見つけた。

「どうしました？」

首を傾げる雀耶さん、その後ろに並ぶ席の、窓側一番端の後ろ、つまり角の席にまだ生徒が残っていた。

誰か、までは分からない、何故ならその生徒は、机な顔をうつ伏せていたからだ。

あの席は、誰だつたか？ 先週席替えしたばかりで把握出来てないんだよな。

ともかく、もう放課後だ、多分さつきの授業中に落ちたんだろう、

起こしてやつた方が良いよな。

『ようこそ雀耶さん!』と一文を残して日誌を閉じ、寝ている生徒の所へ向かつた。気付いた雀耶さんも一緒に付いてきた。

「えつと……この方は……」

やはり転校生な雀耶さんは分からぬか、まあ俺も今分かつてないけど。

とうあえず起こしやつ、手始めに机を叩いてみる。

「……」

無反応。眠りは深いようだ。

とこうか近くに来て分かつたが、睡眠生徒は女子だった。だが気にしない、彼女の為にも起こす方が良いので、俺は肩を揺さぶつた。

「起きろ、もう放課後だぞ」

すると、

「……?」

もぞもぞと動き出したので手を離すと、むくりと顔を上げた。

揃えられた前髪、だがもみあげの右側だけなぜか長いとこうアシンメトリーな髪型をした黒髪。起きたばかりだからか、眠そうに細める目の前に、縁の無いメガネをかけている。

その顔を見て、名前を思い出した。

「おはようさん、玄平」  
玄平武乃。<sup>くわひらたけの</sup>当たり前だが、クラスメイトだ。

「……」

やつぱりまだ眠いんだろう、ボーツと前を見ている。俺達はぼやけて見えているだろうか。

「玄平さん、おはようございます」

雀耶さんが声をかけると、

「……!」

完璧に目を覚まし、驚いたように目を丸くする。

そして急に慌てふためき、席の横にかけていた鞄に手を突っ込んで

ある物を取り出した。

それはキャップ式の水筒で、蓋を開けた玄平は水筒を傾けてその中身を自らの喉に流し込んだ。

その行為は、起き抜けで喉が渴いていて声が出せなかつたから、ではない。

『……ふは

飲み終わった玄平が、口を開いた。

『おはよー朱井さん』

その姿からは予想出来ない明るく間延びした声が。

「え……は、はい、おはよう」  
『ぞい』

雀耶さんはぽかんとした顔だ。無理もない、メガネに黒髪で、物静かなイメージが強い容姿から、その真逆な明るい間延びした声が出でくれば、初対面の人はそのギャップに驚くはずだ。  
まあ、玄平が喋る時は、大体驚かされるけどな。

えつと、今回の声は……

「今日は……山吹か？」

『うん、そうだよ～』

声と一緒に、こくりと頷く。

「ど、どうじうことですか？」

雀耶さんは今だ困り顔で俺に訊ねてきた。これからクラスメイトになるわけだし、説明させておいた方がいいな。

「玄平、説明してやつてくれ」

『おつけ～』

そう言つて再び頷く玄平。言葉使いと動きは合わせないんだよな……

この玄平の言葉使い、それには先ほど飲んだ液体が関係している。  
飲むことで他人の声を真似して使うことが出来る水。『声変えの水』  
略称を、『声水』<sup>（じぶみず）</sup>という物だ。

最初聞いた時は、何だそのファンタジー設定はと思ったが、いざ飲んでみると本当に変わってしまい玄平の声真似ではないと分かる。  
ちなみに変わるのは声だけで、口調は玄平自身が変えている。

では何故、そんな物を持っているのか、それにはある一人の生徒が関わっている。

玄平武乃、彼女が出席番号順で席に並ぶと、前に黒石が来る。黒石は何かを企む度、どうやって作ったんだという道具をよく持つて来ていた。中には声水のような、言つといふの魔法じみた機能を持つ物だつてあった。

一度、どうやってこんな物用意したんだよ、と訊いた時、黒石はこう答えた。

『俺さ、魔法使いだから』まさかそんな訳ないだろ、と笑ったのを覚えている。結局その時ははぐらかされてしまいタイミングを逃したが、そんな魔法じみたアイテム生成家自称魔法使い黒石の席が目の前にある。気まぐれで渡して、玄平がそういう物を持っていても別におかしくない。

『これからよろしくね、さくちゃん』

さくちゃんとは、昼休みに山吹が考えた雀耶さんのニックネーム、まだ誰もそう呼んでないが、聞こえていたのか玄平は山吹の声でそれを使つた。

「はい、よろしくおねがいします」

雀耶さんと玄平は会話を始めた。と言つても聞くだけなら雀耶さんと山吹の会話に聞こえるが。

声はともかく、玄平は真似た人の口調まで似せる。そんな変わった特技のせいか、あるいは本人の性格故か、玄平はあまり人と関わらずクラスでは孤立している方だった。

質問すれば、声を変えて返す。会話を持ちかければ、声を変えて応じる。と、完全な無口ではないので特に問題はない。声を必ず変える事を除いて 無い筈だが、自らそれをしようとは思わないらしい。

だから、玄平がこうして誰かに声をかけて話をしているのはとても珍しい光景だ。

これがもし、玄平本人の声だとしたら……珍しい、以前の大問題だ

な。

日直でペアになつた生徒を始め、担任や先生にまで、自らの声を聞かせたことが無いらしい。

それくらい、徹底していると考えた方が良いのか、それとも、かなりの変わり者として見た方が良いのか……

『ん？ わたしの顔に何かついてるの？』

じつと見ていたせいか、玄平は俺を見て首を傾げた。

「いや、別に、それより時間大丈夫か？」

壁に掛かっている時計を指差す、現在の時刻、15時43分。

『あ！ いけない、部活行かなく…』

急に言葉を止めて慌て出し、鞄に教科書や筆箱を詰めて席を立ち、入り口へ、

「玄平さん、また明日です」

雀耶さんが声をかけると、

「……」

こちらを向いて手を軽く振り、一言も言わずに行ってしまった。

「玄平さん、途中から声を出さなくなりましたけど、どうしたんでしょう？」

「多分、声水が切れたんだよ」

服用した量や声を出すことで変えていられる時間が異なるらしい。さつき言葉の途中で切れたんだろう。

「彰、朱井さん」

日誌を持った竜華が現れた。

「今のは、武乃か？」

同じ教室内にいたから聞こえていたよな。

「つうか、竜華と玄平って仲良いのか？ 今名前呼びしたよな？」

「一年生から同じクラスだ。ある時本人も名前で呼んでくれと言っていた。彰だつてそうじゃないか」

「いやそうだった。

「だが、本人の声は聞いたことは、無いな」

一年生の時、その頃は紀虎も同じクラスだった。

最初のホームルームでの自己紹介の時、玄平は

『玄平武乃です！ 頂よろしく…』

まさかの声を変えを披露して周りを驚かせた。特に驚いていたのは、その後に同じように同じ声で自己紹介をしようとていた紀虎だろう。まあ、その言葉と裏腹にただ頭を下げるという動作をしたときにはもう違和感満載だったけどな。

「玄平さんって、ずっとそういうなんですか？」

「ああ、教科書の音読から英語の発音まで。武乃本当の声を知る者は学校にもいないとこつ話だ」

……ん？

「そういや……俺、玄平の声聞いたことあるかも」

「なに！？ それは本当か！？」

竜華が詰め寄つて訊いてきた。それだけ珍しいことなんだが。

「あれは確か……文化祭の時だったと気が……あれ？」

なんか、よく思い出せない。

「……悪い、忘れちまつた」

「なっ！？ なぜそんな大事なことを忘れるんだ！」

そこまで驚くことないだろうに。

「そんなん大事か？」

「当たり前だろう！ 武乃の声は流れ星くらいの貴重度だぞ！」

天体レベルかよ。

「つか、竜華にしては珍しい言葉が出てきた」

「つづ！？」

途端に竜華の顔が赤くなつた。自分で言つて似合つてないのを悟つたな。

「流れ星に願えば、玄平の声が聞こえるんじゃないかな？」

「も、もつこの話は無しだ！ 早く先生のところに行くぞー！」

「へーい」

俺達は職員室へと向かつた。

……しかし、玄平の本当の声を聞いたことがあるのは事実だ。

確かに、一年生の文化祭だったと思うが……妙に思い出せないな。

こうなつたら、玄平本人に聞いてみるのが一番だな。

思い出せるかもしれないし、ひょっとしたら、運良く玄平本人の声を聞けるかもしないから。

「はあー、疲れた……」

鞄を机に放ると、そのままベットに倒れこんだ。

学生寮、基本2人一部屋なのだが、俺は1人でこの部屋を利用している。別に仲間外れにされた訳じやない、これにはちょっとした理由がある。

この学校、去年までは全寮制だった。しかし今年に入つてここへの進学を考えた者が多く、なるべく受けられた結果、全学年で学校から家までの距離が近い生徒には家から通うことを義務付けられたのだ。知っている顔で言えば、陽斗と山吹、後は紀虎と……あ、玄平もうだつたかもしれない。

とまあこんな感じで寮生の数を変えていったところ、俺が1人余ったということだ。

だから男子の転校生が来たら学年関係なくルームメイトになるという約束付きだが、そうそう来るものじゃなく、今も1人だ。

本来一段ベットになる物の一段目を外して一段になつたベットの上で寝転がりながら、ふと、今日の出来事を思い出した。

今朝は日直の為、遅れないようにと竜華が迎えに来た。  
ちゃんと礼言つたはずなのに、なんで怒られたんだろうか？

ホームルームの時、転校生として紹介された雀耶さんが隣の席につた。

物腰が低く、男女クラスメイトに対して分け隔てなく接していた。すぐにクラスになじむだろう。

昼休みには、紀虎が現れた。

購買で出会った竜華との勝負に勝つて「機嫌だつたな。

放課後、寝ていた玄平を起こした。

久々の声水を聞いて、昔本物の声を聞いたことを思い出す。本人に訊こうと思うが、あの性格だ、結構難しいだろうな……

「……結構、充実した一日だつたかもな」

何もない日は本当に何も無く過ぎていく、だが今日は日直から始まつて、ホームルーム、昼休み、放課後と出来事が多かつた。

「……楽しめるのは、今しかないもんな」

高校の三年生、つまり来年には高校を卒業して、皆、大学や就職、それぞれの道に歩むこととなる。

正直言つてしまえば、まだ先を決めてない俺は、遅い部類だ。クラスの中にはもう先を決めている者も数人いるというのに。まだそれすら決めてない、全く焦つたいない俺は、ある意味では問題なのだが……

「……」

焦つてないのは問題なのかもしれない。

けど、一生の中に高校三年生は今しかない。

それを、潰したくはないだね？……？

1 s t      d a y      f i n

## 1st day ? (後書き)

一日目が終了しました。

この日は、主要の登場人物を紹介する話で、彼らを中心に秋の物語は進んでいきます。

それぞれが自分の道を選ぶ三年生、そこでまだ選んでいない一人の少年。彼が皆と関わり、選んでいくのはいったいどんな道なのでしょうか。

それでは、

## 2nd day ?

一夜明け、日直ではない今日はいつも通りの時間に置き、数分で準備して寮を出た。

昨日より遅いといつても十分そこいらで、心無しか向かう生徒が多い氣がするが、まあそれだけだ。

季節は秋、落ち葉が散つていて、同じ方向で、学校という同じ場所に向かうだけで、普段と変わりはない……

「緑葉くん！」

「ん？」

名前を呼ばれた。立ち止まって振り返ると、

「おはよひじやれこます、緑葉くん」

雀耶さんが後ろからやって来て、俺の隣に並んだ。

「雀耶さん、おはよう」

「はー」

並んで歩き出す。

「学校には慣れた？」

「さすがに一日では無理ですよ」

「そりゃそうだ」

「ふふつ、ですが皆さんは優しいので時間の問題だと思います」「確かにクラスメイト達は雀耶さんに優しいし、雀耶さんも誰とでも別け隔てなく話してるから、そつだらつな」

「じゃあさ、次の休みにでも街案内するよ。複数人で遊びながら」

「それはありがとうございます」

俺の提案に雀耶さんは微笑んだ。

これで決定だな、と思つていたら、

「ですが、わたし、この街には少し詳しいんですよ~」

「え？ そうなの？」

まさか転校生の雀耶さんが転校先の街に詳しいとは。

「事前に調べたとか？」

「いいえ、確かにわたし転校して来ましたけど、この街が地元なんです」

「へえー」

親の都合とかで遠くに行つてたんだらうか。

「小学校卒業まではこちらで過ごして、中学へ行くと同時に両親の都合で引っ越ししたんです」

あつさりと教えてくれた。「ということはさ、雀耶さんと小学校が同じだったのが今同学年にいるかもしぬなってことだよね」通学が楽な為に地元の高校を受けようと思つ人、一人くらいそうだな。

「そうかもしぬんね……ですが」

急に、雀耶さんの声のトーンが落ちた。

「どうしたの？」

「……実はですね、子供の頃、ちょうど小学生の間の記憶が思い出せないんですよ」

「え……？」

記憶が、思い出せない？

「わたし、中学生の時交通事故に合いまして……その時に頭を強く打つたらしく、昔の記憶が思い出せないとこがあるんですね」

「……」

交通事故で記憶喪失。知り合いに本当にそうなつた奴を知つてはいるから、信じられる。

まさか、雀耶さんもそうだつたなんて……  
けど、分からぬ事が2つある。  
一つは、

「小学生の時だけなの？」

「はい……何故かそこだけ露がかかるつたようにして、何か、とても大切な思い出もあると思うんですけど……」

雀耶さんは顔を俯かせてしまった。それはそうだ、こんな事言いた

い訳が無い。でも俺が思い出させてしました。

何か、フォローしないと……

「だ、大丈夫だよ、きっと」

「え？」

少し顔が上がり俺を見た。

「記憶喪失つても、完璧に忘れた訳じゃないんでしょう？　だったら何かをきっかけに思い出せるさ、きっと」

「縁葉くん……」

雀耶さんの顔が真っ直ぐ上がり、「はい、ありがとうございます」とこじりと微笑んだ。

その顔に、思わずドキッとした俺は、「い、いや、別に、普通のことだよ」

冷静を保ちつつ、

「と、ところでさ」

もう一つの疑問について訊いてみた。

「はい？」

「何でその話、俺にしてくれたの？」

今分かつたように、そんな軽い話じゃない。一日そこいら会話をしただけの転校先のクラスメイトに話せるようなものじゃない筈だ。

「それはですね」

雀耶さんは一拍置いてから、答えてくれた。

「転校先の学校で、初めて仲良くなつたお友達ですか？」

一時間目は体育だった。

この学校では体育や家庭科等の授業は一組合同で行っていて、A組

はC組と、俺達D組はB組と行っている。

夏休みが終わってから内容は男女別の球技、場所は体育館でB、D男子組はバレーボールのネットを張っている。

その中、ボールが飛ばない為に仕切りのように張られたネットの向こうでは、既に勝負が始まろうとしていた。

「勝負だ！ 竜華！」

B組の紀虎の声が響いた。少し肌寒くなつてきたこの季節に体操着の半袖とハーフパンツという格好で指さした先には、同じく半袖に長ズボンのの竜華が立つてゐる。

「受けて立とう」

手に持つたバスケットボールを弾ませながら答えた。

毎回思うのだが、竜華は紀虎との勝負を楽しんでいる氣がする。けど、一度そうだと訊ねてみたら、

「ち、違うぞ！ 私は別に楽しんでなどいながらな！？」

と声大きく否定していたから、違うらしい。

けれど今日や昨日のも含め、竜華は紀虎からの勝負は断らないんだよな、楽しんでないなら、たまには断ればいいと思うんだが。

……ふと、紀虎が竜華に勝負を挑み始めたきっかけを思い出してみた。

あれはそう、高校一年生になつて初めての体育の授業の日、内容は男女混合のバスケ。

クラスの中で2チームを作り、計4チームでの総当たり戦が開始され、俺達のクラス同士での試合になつた時、相手チームの中に一人で突つ走つて点を取るワンマンプレイヤーがいた。

言わずもがな、それが紀虎だった。

「オラオラあー！」

一人でドリブルをしながらこちらのディフェンスをかわしてゴール前、後一人となつた。

「こまま決める……ぜ？」

だが紀虎はシューートを決められなかつた。ゴール前最後のディフェ

ンスに、ボールを奪われたからだ。

「なにつ！？」

紀虎が振り向くころにはボールはバスの連続を受けてから「ゴールへシユート。こちらに点が入った。

「おお、アンタ、なかなかやるな！」

紀虎が自身からボールを奪つたディフェンスに声をかけた。もう分かること思うが、そのディフェンスが、竜華だった。

「バスケットボールとは個人競技ではない。一人で走るからこうなるのだ」

竜華は腕を組み、紀虎に指摘をする。

「でもよ、個人技は必要だろ？」

2人はそのまま会話を始めてしまつた。

「確かにそれも必要だ。だが授業として行つてている限り、重要なのはチームプレーの向上なんだ」

「ふうん、面白い奴だなアンタ、同じクラスだつたよな」

「青山竜華だ」

「アタシは白本紀虎。よろしくな、竜華」

「ああ、よろしく頼む、紀虎」

この時すでに2人は互いを名前で呼んでいた。  
そして固い握手を交わした後、

「つうわけで、竜華は今日からアタシのライバルだ！」  
紀虎は竜華にライバル宣言をしたのだった。

「……は？」

いきなりの理解不能宣言に竜華は首傾げる。

「だから、ライバルだつて、強敵と書いて読むアレだよ」

実際は、好敵手と書いてライバルだ。それは漫画とかの中のルビだな。

「いやそれは分かるのだが、何故ライバルなんだ？」

「そりゃあ、竜華が強い敵だからさ」

「漢字の意味ではない！ 何故ライバルにならねばならないのかと

訊いているんだ！」

ちなみに、2人がこうしている間もバスケの試合は続いている。両チームのエースが抜けたので、わりと変わらないバランスの勝負になっている。

しかし、竜華が怒鳴ったのを聞いて竜華側の一人……まあ俺だ、が抜けで2人に近寄った。

つか、全部聞いてたんだよな。

「どうどう、落ち着けよ竜華」

「彰！ しかしな……」

「お？ アンタは？」

「縁葉彰だ、竜華とは幼なじみってやつでな」

「おーじゃあちようど良いや、ちょっとと説得してくれよ」

「なんでそうなる、怒らせたのお前だろ」

「いいからいいから、な？」

調子のいい奴だな、まあ元々そのつもりで来たんだ。

「竜華、とりあえず落ち着けて」

「そつは言つてもだな、いきなりライバルと言われて落ち着けるか？」

とりあえずそこまでヒートアップはしないと思うが……まあいか、

クールダウン対策はある。

「竜華、知ってるか？」

「何をだ？」

「強敵と書いてライバルって読むのにはな、もう一つの読み方があるんだ」

「もう一つの読み方？ 何だそれは」

よし、かかった。

「トモ、って読むんだ。ライバルにして、友達つて意味になるんだぜ」

「！？ そ、それは本当か？」

「ああ、強敵と書いてライバル。そして強敵と書いて、トモだ。」

「そ、そ、うか……トモ、友達か……それなら、悪い気はしないな」「だろ？ 白本と竜華はライバルになつた瞬間、友達になつたんだよ」

「おお……」

竜華の顔がニヤけた。別に友達が少ない訳ではないが、相手側から友達になつてくれと言われると竜華は毎回こつななるのを、俺は知つてゐる。

その時、会話してるだけの俺達を見た先生が笛を鳴らして注意してきた。

「む、不味いな、戻るぞ」

クールダウンした竜華が一足先に元のポジションへ戻つていく、俺も戻ろうとすると、

「ナイスだぜ、緑葉」

紀虎に呼び止められた。

「昔から竜華を知つてゐるからな、予想通りの反応だつたさ」「へえー、でもよ、あれをあつさり信じるのはスゴいな

「まあ竜華だからな」

アイツは漫画読まないから知らないんだろう。

「ま、説得してくれてサンキューな。同じクラスだし、仲良くしようぜ」

「紀虎でいいぜ、アタシも彰つて呼ぶから」

これが俺と紀虎の出会い、そして、2人が戦い始めた理由だ。

## 2nd day ?

昼休みになつた。昨日に続き雀耶さんの周りではクラスメイト達によるランチタイムが開かれている。

俺もまた昨日と同じで、陽斗の席がある方へと来ていた。メンバーは陽斗、竜華、山吹と、俺の四人。席が近くにある黒石は不在だ。紀虎は……まあ多分来ないだろうな。体育で竜華に負けて悔しがつてたし。

というわけで、いつもの四人なわけだが……ふむ、もう一人増やしてみるか。

席の方を見ると、案の定そこに座っていたのを発見。

「おーい、玄平、一緒に食わねえか？」

手を振つて玄平に声をかけてみた。

「…………？」

予想外だったのだろう、玄平は無言のまま首を傾げた。

「お、おい彰、お前何考えてんだよ」

それを聞いた陽斗が俺に追及してくる。

「別にいいだろ？ 仲が悪いわけじゃねんだし」

「ま、まあそりゃそうだけよ……」

ただ、あまり関わりたくは無いんだろう。

「…………」

竜華は気づいたようで、俺を一瞬見るとすぐに視線を戻した。

そう、これは玄平の声を聞こうという作戦の一つ。声を聞くにあたって、一番の近道はやはりちゃんとした友達になることだろう。別に誰かと話せないというわけではないが、それはクラスメイトであるからで、友達とは異なる。まさか本当の友達に対しても、玄平も声水を使わずに話してくれるだろう。

というわけで、まずはこうして気軽に昼食を共にしようという訳だ。

「のんちゅ～ん、おいでよ～」

それを知らない山吹は純粋に玄平を呼んでいた。のんちゃんとは、玄平のあだ名だろう。

「……」

少し思案顔になつた玄平はやがて、こぐりと頷くと昼食の入つた袋と水筒を持ってきた。

近くにあつた机をくつけて俺と竜華の間に席を作つてそこに入つた。

席についた玄平はまず、水筒の中身をフタに注いで一飲みした。そして、

『お誘いありがとうございます』

雀耶さんの声で、お礼を言つた。

あの水筒の中身、声水だったのか。

「お~、久々に聞いたよ」

山吹が声水に驚いている。まあ滅多に話さない玄平だからな。

「ねえねえ、わたしにも少しちょうだい」

『はい、良いですよ』

玄平はフタに声水を注ぎ、山吹へ手渡す。

結構重要な物だと思うが、案外簡単に別けてくれるんだよな。

受け取つた声水を、山吹は一気に飲み干す。

『ふはあ、ありがとう、のんちゃん』

すると山吹の声が変わり、竜華の声になつた。ただし、口調は山吹なのでスッゴい違和感満載だ。

『おお！ りゅーちゃんの声だ！ すげえりゅーちゃん！ りゅーちゃんの声だよ！』

驚く山吹だが、声水を知らないで竜華のあだ名を知つてゐる人が聞けば、自らのあだ名を自分で呼んでいるようにしか聞こえない。

「な、奈津保、分かつたから大声で言わないでくれ」

現に竜華は恥ずかしそうだ。ただこの中でならその条件に当てはまる人はいないから大丈夫だろう。

『じゃあみんなも変えればいいんだよ~、そうすれば誰がダレか分

からなくなるから問題なし…』

いやそういう問題じゃないだろ、山吹。

『皆さんもいかがですか？』

玄平は席を立つて自分の席に戻り、鞄の中から紙コップの重なった物を持ってきた。用意周到だな。

「いいのか？ 限りがある物だろ？」

『「心配な…』

玄平は途中で口を押さえて言葉を止めた。声水をフタに注ぎ、一気に飲み干す。

『「ふはっ…」』心配なく、まだ沢山ありますか？』

玄平は水筒を振つて中身がまだある事を示した。

『「ほらりゅーちゃん、りゅーちゃんも飲もうよ～』

「わ、分かつたから奈津保、その声であだ名を連呼しないでくれ」

こうして、俺達四人は声水を口にし、声が変わった。

『「みんなで変わるとおもしろいね～』

山吹は竜華の声、普段の竜華からは想像出来ない言葉使いが多く飛び出していく。

『「オレはあんまり変わつてねえけどな』

陽斗は俺の声、元々あまり変わらないから対した変化は見られない。

『「つ…やはり、妙な気分だな…」』

竜華は陽斗の声、元々アルトよりの竜華だが、さすがに男子の声になると変化が分かるな、雰囲気はあまり変わらないが。

そして、俺はと言えば…

『「そういうや彰、次の授業何だつたけ？」』

『「…』

『「なあ、彰？」』

『「…』

自分の声に呼ばれるのは妙な気分だな…

『「聞こえてんだろ？ 彰』』

そつここそ、次の授業実は知ってるだろ、山吹。

けど答えないとそれまで訊ねられ続けられるだらうしな……

『…………がく』

『あ？ 何だつて？』

絶対聞き取れてた筈な陽斗は手を耳に当てて再度訊ねて来やがった。チクシヨウめ、昨日の仕返しか？

『数学だよ！ 数学！』

『あつはつはつ！ やべ、面白過ぎるー』

俺は山吹の声に変わつていた。まあ今までの流れを見るに残つたのはそれだけだつたけど、まるでヘリウムガスを吸つた後みたいだ。

『あつはつはつ！』

陽斗はそれを聞いて大笑い。声は俺のなので俺が笑つてるようだが、笑われてるのが俺だから余計ムカつく。だからつて何か言おうものなら、更に笑われるだけだ。

くそ、早く効果切ってくれ。

『ふふふ、皆さんお楽しみのようで何よりです』

玄平まで笑つてる……え？

……玄平が、笑つた？

『ですが藍田さん、緑葉くんを困らせてはいけませんよ』

しかも、俺を氣使つた？

今は雀耶さんの声と口調だが、あの基本無表情な玄平が口に手を当てて笑い、俺をかばつた。

今まで他人にそういうことをした所を見たことは一切無かつた玄平が……

『でもよ、こんなに面しろ……あ

陽斗の声が元に戻つた。次いで山吹、竜華、俺の順番で効果が切れた。

「ちえ、もう少し楽しめると思つたんだけどな」

『効き目の切れる時間は人それぞれですからね』

昼食の水として声水を飲んでいた玄平だけが今だ声が変わつている。

「私としては、早く戻れて良かつたが」

「俺もだ、つづづく高い声が自分に合わないと実感したぜ」

その時、昼休み終了のチャイムが鳴った。雀耶さんの所に集まっていたクラスメイト達も各自席に戻り始める。

『昼休み終わってしまいましたね、すみませんがわたし、少々やらなくてはいけないことがありますので先に失礼します。お誘い、ありがとうございました』

本当に雀耶さんが言いつた台詞を残して、玄平は席を立つて荷物を持ち自分の席へ戻つて行つた。

『……』

それを確認後、俺達は肩を寄せ合つて、玄平に聞こえないよう小声で話した。

「今玄平の奴、笑つたよな？」

「うん、しかも普通にだよ。しぐさだけとかじやなくて、普段の玄平なら、声と口調は変えるが笑いのしぐさは一切なく無表情。だがさつきのは、どう見ても笑つた顔をしていた。

「なんだ？ 今日はこれから雪でも降るのか？」

「それはまだ季節的に早いと思つよハルくん」

「いや、奈津保、今のはそういう意味で言つたわけではないと思つんだが……」

それぐらい、珍しいことつことだ。

いつたい何がそいつさせたんだ？ 昼飯に誘つたことか？ もしその程度で良いなら、これからも誘つてるか。

ひょつとしたら、もつと俺達と仲良くなれば、本当の玄平の声が聞けるかもしれないからな。

特に何のへんてつも無く、午後の授業が終わり放課後となつた。用事も無いし、誰か誘つて帰るか。と思つて教室内を見回していると、陽斗を見つけた。

「陽斗、帰るうぜ」

「あ、ワリい彰、オレ先生に呼ばれてんだ」

「? 何かしたのか?」

「行きたい大学がな、今そのままじゃヤベえって言われてな」

「……」

大学か……

「ん? どうした彰?」

「……いや、別に、じゃあ他当たるわ

「おう、じゃあな」

陽斗は鞄を持つて教室を出て行つた。

「……」

そうか、陽斗も先の事決めてるんだな。

それに比べて、俺は……

……やめよう。今考えるのは、誰かと帰る事だけだ。

「縁葉くん」

後ろから声をかけられた。声で誰か分かつたけど、振り返り答える。

「どうしたの? 雀耶さん」

「良ろしかつたら一緒に帰りませんか、わたし達と」

見れば雀耶さんの隣には童華が立つていた。

「て、いつの間に2人はそんな仲良しに?」

覚えてている限り2人が話しているのは昨日の放課後の時だけだ。

「今日の体育の時、少しな」

「童華は凄いんですよ、チームをまとめる統率力に的確な指示、加えて自身も運動神経抜群なんですから」

「いや、私一人が凄いわけではない。雀耶達皆が頑張ってくれたからの勝利だ」

「……」

2人共、既にお互い名前呼びするほどの新密度ですか、竜華はともかく雀耶さんの名前呼び捨て呼びとか珍しそう。

今日の体育になにがあつたんだ……

まあ、答えは出ないのは分かつて。今はせつかくのお誘いを無駄にしない事だ。

「帰ろうか、二人とも」

鞄を肩にかけて先陣を斬つた。

その時、

「朱井さん、ちょっと良いかな？」

雀耶さんと呼びとめる声、三人でそちらを見れば、そこには黒石がいた。

「わたし、ですか？」

「うん、ちょっとコツチへ」

黒石の後に続いて雀耶さんは教室の端へ行つてしまつ。

「何をしているんだ？」

「さあ、サプライズの説明とかじやねえか？」

黒石が何か書いていたのは知つてゐる。多分それに関わる何かだとは思う。

2人は小声で何かした会話している。一いち方にその声は聞こえない。

「…………！？」

少しした時、雀耶さんの顔に驚きの表情が見えた。

「…………？」

「…………」

それから一言ずつ話すと雀耶さんは俺達の所へ、黒石は教室を出て行つた。

「すみません2人とも、わたし用事が出来てしまいまして、一緒に帰れなくなつてしましました」

申し訳なさそうに頭を下げる雀耶さん。

「そうか、だが用事ならば仕方が無いな」

「すみません、竜華、緑葉くん、また明日です」

再び頭を下げ、雀耶さんは教室を出て行つた。

「彰、仕方が無いから、私達だけで帰るぞ」

「ああ、そうだな」

用事とは、明らかに今の黒石との会話が関係しているだろう。今だ

つて雀耶さん、黒石が行った方向に向かつてつた。

雀耶さんのさつきの表情も気になるし、黒石の奴、何を吹き込んだんだ？

## 2nd day ? (後書き)

「」を書き終わってから冷静に考えましたが……  
小説だと声が変わったとか分かりにくい！と思いました。  
しかし、これはこれで必要な伏線ですし、分かりやすいようにして  
おいたので、どうかご勘弁のほどを。

それでは、

さつきの表情も気になるし……黒石の奴、何を吹き込んだ？

「彰、おい彰！」

「！？」

竜華の声に気づいた俺の正面に電信柱があった。

「あぶね！？」

とつさに避け、直撃を待逃れた。

「全く、しつかり前を見て歩かないからそうなるんだ」

竜華に呼ばれてなけりやぶつかつてたな。

「サンキューな、竜華」

「なにか考えごとか？」

「ああ、さつきの雀耶さん、黒石と何話してたんだろうなって」

「黒石か……また何かよからぬことを考えていいなければ良いのだが

……

黒石のサプライズ。サプライズ故に、好みない人もたくさんいる。大半が先生。D組のクラスメイト達は基本楽しんでいるが、反対派

もごく一部、竜華はその筆頭と言つていい……

「でもきつと雀耶さんの歓迎会とかじやないか？ 竜華もそれなら協力するだろ？」

「むつ、それならば……しかしだな……だが雀耶の歓迎会ならば……むむ……」

ただ竜華はその内容によつては協力してくれる。半、反サプライズ派と言つた方が良いかもな。

「もし動員要請があつたら声かけるか？」

「つ……」、この話は終わりだ！ そもそもサプライズをする相手にそれを伝えてはダメだろう！

そういうえばそうだな。

「じゃあ、あの会話は何だと思つよ」

「今の時期を考えると……進学の話とかではないか?」

「……」

進学……

「彰?」

「……なあ、竜華は高校卒業したらどうするんだ?」

「私が? 第一志望は進学だ。後を継ぐために必要な事を学ばなく  
てはな」

竜華の実家は中華料理屋だ。子供の頃は俺もよく行っていた。

「調理師免許も必要だが、店を経営するとなれば経理の能力もいる。  
それらを学べる大学をすでに調査済みだ」

「そうか、竜華ももう、先を決めてるんだな……」

「そういう彰はどうなんだ」

「俺か? 俺は……」

まだ、決めてない。これはしたくない。というのもなれば、これ  
がしたいというものもない。

このままなら、卒業と同時にアルバイターになる。バイトはして  
からパートにはギリギリならない。

「まさか、まだ決めてないのか?」

「……」

俺の無言で竜華は理解したらしい。

「彰、余計な世話かもしれないが、この時期に決めていないのはマ  
ズくないか? セめて進学を……」

「別に良いだろ、竜華に迷惑かけてねえし  
つい、怒気の隠つた声が出てしまった。

「うつ……」

急に俺が怒ったように見えたからか、竜華はたじろいだ。

「……悪い、また明日な」

空気が悪くなりすぎた。俺は竜華に謝りつつ、その場から逃げたい  
一心で走り出した。

「あ、彰! !」

後ろから竜華の声がしたが、止まるところなく、俺は寮まで走り続けた。

「マズったかな……」

寮の自室、息切れながらも入った俺はそのままベッドに飛び込んだ。竜華の言葉は正論だ、何も間違っていない。だが、そういう正論を述べられてしまつとつとい伊拉ッとしてしまつという人の性だとかなんとか……

「……ダメだ、考えるほど罪悪感が……」

明日、竜華にもう一度ちゃんと謝る。謝る。として、他の事を考えよう。

朝、雀耶さんと出合つて一緒に登校した。

実は記憶喪失だという凄いカミングアウトをされたが、それは仲良くなれたってことだよな。

本日の紀虎対竜華は、竜華に軍配が上がった。その時にふと最初の勝負を思い出し、その頃から紀虎とはお互に名前呼びになつてた。

昼休みには、玄平を昼食に誘つたらあつさりと承諾した。声水には困らされたが、そのおかげで玄平の笑みというのを始めて見た。

そして、放課後には竜華と……

……結局、ここに至るのか。

明日、必ず謝る。とりあえずこれだ。

だが、先も考えなくちゃいけないよな……

「……昔は、何を考えてたんだろうな」

小学校や中学校の卒業アルバムには、将来の夢といつのを書いた覚えがある。

内容は覚えてないが。少なくとも、その時の俺がなりたかった職業が書かれている筈だ。

今度、家に帰った時に見てみよう。

そう、もう少ししたら、秋休みだから……

2nd day fin

## 2nd day ? (後書き)

一日目が終了しました。

そろそろ、主人公の動く理由が分かつて行くようになつてきました、  
彼を中心に起動し始める『秋』。

そこに関わり、起動の最終スイッチを押すのは  
それでは、

### 3rd day ?

登校中、風に舞う落ち葉を見ていると、秋だなーと思ひ……つて、そんな現実逃避してゐる場合じやない。

「いなか……」

竜華を探して、いつもより早めに寮を出た今朝、だが結果は「」覧の通り全く見つからない。

回りには普段登校していても見かけない生徒ばかり、「ん?」「ん?」

その中に、見知った後ろ姿を見つけた。

へえ、あいつこんな早くに学校行つてゐるのか。  
俺はかけよつて声をかけた。

「よつす、紀虎」

「ん? おお、彰、はよつす」

紀虎は鞄を肩にかけ、片手で文庫サイズの本を持っていた。カバーがかかっていて、何かは分からぬ。

「彰もこの時間だつたのか」

「いや、今日は用事でな、いつもはもう少し遅い」  
「用事つて何だ?」

「それはな……」

俺は紀虎の隣に並んで歩き、昨日あつた事を話した。

「ふーん、卒業した後のことか」

「紀虎はどうするんだ?」

「アタシは大学行く、スポーツ推薦で陸上が有名な所にな」

「そうか……紀虎もちゃんと先の事考えてるんだな。」

「彰も大学行くなら早く決めた方が良いぜ、推薦もうえなくなる前にな」

「そうだな」

とは言つても、そう簡単に決められるものじやない。その選択が、

そのまま将来の自分に直結するかもしれないんだからな。  
せめて何か、目指す理由でもあれば……

「……？」

ふと、紀虎が持っていた本が気になつた。  
妙な空氣（俺だけだが）になつてしまつたので、話題を変えよう。

「何の本読んでたんだ？」

「ん？ コレだよ」

紀虎はページをめくつて目次を俺に見せた。  
そこには、こう書かれている。

### 『常敗ピンチヒッター』

「……なんだソレ」

聞いたことない題名だつた。感じを見るに、ライトノベルっぽいが。

「え！？ 彰コレ知らねえの！？」

何故かスッゴい驚かれた。

「あ、ああ……」

引き気味に答える。

「はー、まさかジョウハイ知らねえ奴がいるとはな

ジョウハイ？ あ、略称か。

けどオーバーだな、その辺歩いてるのに聞けば一人一人は知らない  
のもいるだろ。

「そんなん面白いのか？」

「マジヤベエよ！ アタシあんま小説つて読まねえけど、ジョウハイはハマつてな」

紀虎は『常敗ピンチヒッター』の面白さを語った。

なんでも、主人公は野球部の監督。その野球部には一人、万年雑用  
をさせられる部員があり、主人公はその部員には隠された力がある  
と信じてピンチヒッターで出して……負ける。

その繰り返しなのだとか。……聞いただけだと全然面白さが分から

ねえんだが。

「今度貸してやつから、絶対読めよー。」

「あ、ああ……」

気押されて返事してしまつ。

しかし、ここまでイキイキした紀虎初めて見た気がしたな。

結局竜華は見つからず、紀虎と共に登校したのだった。

よくよく考えれば、竜華は同じクラスなのだから教室で待つていればいざれ来るに決まっていた。

もう少し考えてから行動するべきだつたな……

という訳で、俺は教室に到着。すでに来ていたクラスメイトと挨拶した後に自分の席へ、後は竜華が来るのを待つだ

「おーい、緑葉ー」

誰かに呼ばれた。

声がした入り口を見ると、先生が俺を見て手を振っていた。

俺は席を立ち、先生の所へ。

「なんですか？ 大和先生」

「ああ、ちょっとな」

大和先生。確かに3Cの担任で、男性にしては珍しく見える家庭科の教師で、先生にしては珍しい名前呼びを強要する……というか、名字知らない。

最初の自己紹介の時も、黒板に大和って名前しか書かなかつたし言わなかつた。他の先生に聞いても答えてくれないし、ある意味、こ

の学校で一番謎が多い先生だ。

「一限で使う資料、運んどいてくれないか?」

そういうえば今日の一限家庭科だったな。でも、

「なんで俺なんすか?」

「だって緑葉、配当係だろ?」

「あー」

そうだった。俺配当係だったな。

配当係とは、今のように授業で使う資料とかを教室に運んで配つたりする、先生のパシリみたいな係だ。

「そこはせめて手伝いって言おうぜ?」

「最近無かつたんで忘れてました」

配当とは言つても、普通の授業でそんな大きな資料そろそろ使わないうから楽出来るだろうと思ってなつた係だからな。案の定、夏休み明けてから今まで係は無かつた。

「とりあえず頼むわ、一人だと多いだろうからもう一人と一緒に来てくれ」

「もう一人?」

係は2人一組、男女でなるので、配当係の女子がいるわけだ……

……配当係の女子つて誰だっけ?

「それも忘れたか」

「はい、誰でしたっけ?」

「俺も忘れた。だから緑葉を呼んだんだ」

じゃあ探しようが無いじゃないですか……

と、その時、

『私は』

後ろから竜華の声が聞こえた。

そうか、もう一人の配当係つて竜華だったのか……つて。

竜華!?

マズイ、確かに待つてはいたが、まだ心の準備が出来てな……

「じゃあ頼むぜ緑葉、玄平」

……え？

俺は隣に並んだ生徒を見た。

『どうした？ 行くぞ』

竜華の声、に変わっている玄平だった。

「……って、なんつうタイミングでその声なんだよ……」

『ん？ どうかしたか彰』

「いや、別に……」

まさか玄平にアレを言つわけにはいくまい。

俺達は無言のまま大和先生の後に続いて家庭科室へ到着。

「それじゃあ頼むぜ」

資料を受け取り、半分ずつ持つた俺達は来た道をJターンして教室へ向かった。

「……」

『……』

その間、無言。

周りの騒がしさがよく耳に届くが……つまりかなり気まずい。玄平が自分から話す奴じやないのは知ってるし、かといってこのまま無言は耐えられない。係の度にこんな感じだつたけか？

『ん？ どうしたのだ、彰』

見ていたのを気疲れ、玄平は首を傾げた。

「あ、いや……」

れつかも訂正したばかり、たすがに一回はまずいな。何か話題を

「く、玄平は、卒業したらどうするんだ？」

『卒業したら？』

しまった、つい竜華の声からそんな事訊いてしまった。まさか玄平が答えてくれる訳がないのに。

『そうだな、一応は進学だ』

……あれ？

『詳しく話すと難しいが、生物学方面の大学だ』

最初は言葉も竜華の真似かと思ったが、内容が違う。これは本当の玄平の卒業後の話だ。

とこりうか、生物学とか勉強難しいんじや……ひょっとして玄平、頭良い？

『一つ、やりたい事があつてな、それにはその道を進むのが良いだろ？と思つてな』

へえ、やりたい事か……俺にも、そういうのが一つでもあれば、今みたいな感じにはならなかつたんだろうな。

『そういう彰はどうなんだ？』

うわ、凄いデジヤヴ感。声も竜華だから本当に一度田みたいだ。

「俺は……まだ、決めてないんだ」

『そつか……』

昨日ならこの後、竜華に言われた言葉でつい怒つてしまつたが、今の相手は玄平。怒つてはいけない。

『……まあ、そういう者も少なからず居るだろ？。卒業と共に就職をとかな』

予想外の答えが返つてきた。

それはやはり、相手が竜華でなく玄平だから。玄平本人の考えなんだ。

『ある意味ではそれも道の一つだ。必ず大学に行かなくてはいけないものでもない、ならばそこを進んでみるのもいい……！』

途中で言葉が止まつた。声水が切れたのか。

両手は資料でふさがり、というか持ち歩いてる訳ないか。

どちらにせよ、これ以上の言葉は期待出来ない。

「えつと……ど、どうもな」

何故か、お礼を言つておぐべきだと思った。

「……」

言葉は無く、玄平はただ頷いた。

「あれ？ りゅーちやんおはよ～」  
「あ、ああ、おはよう奈津保」  
「どしたの？ 珍しく遅いけど」  
「ああ、実はな…」

### 3rd day ? (後書き)

三日目に入りました。  
幼なじみと妙な空気になってしまった主人公、はたして、仲直りする  
ことはできるのだろうか……

それでは、

### 3rd day ?

玄平による竜華の声を聞いて何故か安心してしまった俺は、それは玄平が竜華の声に変えて言つた言葉であつて竜華本人には何も言つていなく結局現状は全く変わつていない。

という事に4限の終了間際に気付いた。

思わず声が出そうになる程の気付くの遅すぎだつたが、授業中なでさすがにこらえた。

そうだった……ヤベエな、次は昼休みで、必然的に竜華と顔を合わせるじゃないか。

「彰」

チャンスでもあるが、まだ心の準備つてのが出来てな…

「あ？　おい、彰！」

「！？」

急に呼ばれて前を見れば、そこには竜華が立つていた。

「ど、どうした？」

「そつちこそどじしたんだ？　もう昼休みだ、場所を空けてやれ」見ればすでに先生は居ず、皆昼食の準備を始めていた。

俺の隣では、多分いつもここに座つているだらう女子が弁当箱の入つた袋を持って立つていた。

つまり……いつの間にか授業が終わつてた、と？

「彰？」

「あ、い、いや、悪い……」

俺は慌てて教科書を机の中に押し込んで席を立つた。

「こつちだ」

竜華の後に続いていつも毎を食べる席、陽斗の席がある方へ歩いていく。

その竜華の後ろ姿を見る……うん、いつも通りの竜華だよな？怒つてる様子も、悲しんでる様子もない。普段通りの竜華だ。

……だが、それはぱつと見の外見だけでの判断。竜華って、あまり本心を表に出さないからな、昔つか。

「どうかしたか？」

「いや、別に」

席にはすでに陽斗（は自分の席だから当たり前か）と山吹がいた。隣の席を借りていつもの四人組を作る。

さて、昼飯の準備だ。

「今日は誰が行く？ やっぱりジャンケンか？」

昼は毎回ジャンケンで負けた2人が購買まで買いに行く。たまに賭けと称して別の方法を取ることもある。

「いや、今日それはいいんだ」

しかし、竜華が訂正した。

「え？ どういうことだよ竜華」

「ああ、実はな……」

竜華は視線を下に泳がせ、急に口元をむった。

な、何だ？ どうしたんだ竜華の奴。

「彰」

とたんに泳がせていた視線を真っ直ぐに俺を見た。

「な、なんだ？」

そうか、やっぱり竜華は昨日の事を思い詰めてて、今ここで俺に謝らせようとした。

「その……昨日は、すまなかつた」

謝った？

「あの後よく考えたのだが、別に大学へ行かなくてはいけないわけではない。就職もまた、一つの選択肢ではあるのだからな」

何か似た言葉を最近、しかも同じ声で聞いた覚えがある。

「い、いや、あの時は俺も悪かったよ。何か、ついカツとなつて言つちまつただけだから……スマン」

「ああ……それでな、そのお詫びと思って……」

用意していたんだろう、席の下から包み袋を取り出して机の上に置

いて、言つた。

「……お弁当を作つてきたんだ」

瞬間、俺の時は止まつた。

「それでな、一人分だけ作るならと思い、皆の分も作つてきたんだ」

その言葉に、陽斗と山吹、そして聞こえて知つていただろう数人のクラスメイトの動きも止まつた。

「おーっす竜華、彰、昼飯食おーぜー」

その時扉が開き、聞こえてきた紀虎の声で俺達は揃つて再生した。

「おお紀虎、ちょうど良い時に来たな」

「あん？ どういう意味だよ」

「実はな、今日は私が弁当を作つて來たんだ。多田に作つたから紀虎も一緒に食べよう」

「！？」

だが代わりに、紀虎の時間が止められてしまつた。

「あ……え、えつと、そうだ！ ワリィ！ アタシ用事あつたんだつた！ じゃ、じゃあな！」

時を止められながら震えながらも言い切つた紀虎は、言い切るや否や扉をガラガラと閉め、走り去る音を残して行つてしまつた。

「そうか、用事ならば止めるわけにはいかないな。さあ皆、遠慮せ

「すぐに食べてくれ」

包みが解かれ、その中身がさらされた。

包みの中は大きめのタッパーが2つ重なっていた。上に見える方はのりで巻かれた黒いおにぎり。なら下の方はおかずの類いだらう。

……さて、何故竜華の発言で時間が止まつたりしたか。

うつすら氣づいていると思うが、あえて少し説明しよう。

竜華の実家は中華料理屋をしている。俺も昔から何度も行つているが、店主である竜華の親父さんが作る料理はどれも旨い。竜華のお袋さんもそれにひけを取らない腕前だ。

だが、その2人の血を引いた竜華の料理は……何をどうしたらそうなるのかと言いたいくらいに美味くなかった。

美味くないのも問題だが、更に言えば、見た目だけは良いという方が問題だ。

その姿に騙され、過去何度口にした事か……今思い出すのも嫌になる。そんな品物が今、俺達の前には並んでいるのだ。

以上、説明終わり。

『…………』

俺、陽斗、山吹は互いに顔を見合させる。3人共その威力を知つている以上、出来れば手を出したくない。何とかして、『まかす方法を考えなくては…

「あ、彰、青川がお前に作つて來たんだから、まずはお前から手を付けるべきだろ、な?」

は、陽斗、お前!

「や、そうだね! ハルくん言つとおりだよー あきくんからびつぞ!」

山吹まで! ……つて、そりゃそつか。

何とか避けたいし、そもそも最初に俺作つて來たつて言つたもんな。

「彰、早く食べてくれないと2人が待ちくたびれてしまつわ」

竜華の手によって、おにぎりが一つ手渡される。

「お、おっ……」

これで逃げ道無し。

手の上にあるおにぎりを食べる道しか残されていない。しかし、その先は必ず……

だがしかし、竜華が詫びを兼ねて作ってきた物。

ここで俺が食わねば、竜華の想いを無下にしてしまつ。

ならば……

「……竜華、サンキューな」

「あ、彰?」

「いただきます!」

決意を固め、俺はおにぎりを一口で

「……あれ?」

「……あれ?」「……」  
いつの間にか眠ってしまったようだ。

顔を上げて前を見れば、席に誰も座っていない。といふか誰もいない。時計を見れば、時刻はすでに放課後で……つて。

放課後!?

ということは俺、少なくとも5時限全部寝てたつことだろ? そんなに眠くなるほど昨日の遅くまで起きてないし、何か他の理由が

「……あ

あ、あつたじやねえか。

思い出したぞ、今日の昼休みに、竜華が作ってきた弁当を食べて、

そして……

「う……」

ダメだ、思い出すのも苦しい。

とにかく、そういう理由で寝た俺を皆はやさしき見守つてくれて、置いて行つたわけか……

「……って、さすがに誰か起こしてくれてもいいだろー。」

油断してたら、明日の朝までここで過ごしてたかも知れないんだぞ。

「まあ、今更言つても仕方ないけど」

とりあえず起きたんだ。もう日も暮れそうだし、さっさと帰ろう。俺は鞄を持ち、席を立つた。

「あれ？」

そこでふと、田に映る物が一つ。

隣の席に、鞄が置いてあった。この席は確か

「あ、緑葉くん」

声がした方を向くと、教室の扉を開けた雀耶さんが教室の中へ入つてくるところだった。

「お田覚めですね。おはよー」ぞーします

扉を閉めて、自分の席、鞄の置いてある席へと向かう。

「お、おはよー……ひょっとして、待つてくれたの？」

「はい、竜華の料理については南野さんから聞きました。そして竜華は、先生に呼ばれて行つてしまつたので、わたしが代わりに待つていたんです」

「そうだつたんだ、ありがとー、雀耶さん」

俺達は並んで寮へと向かつっていた。

すでに部活帰りの生徒もいない時間で、2人きり落ち葉降る並木道を歩いていた。

「そうですか、そのような事が……」

その道すがら、俺は寝る原因となつた竜華との帰路から話をした。

「わたしが一緒に帰れなかつたばかりに、そのような事になつてしまつたんですね……」

原因是自分とばかりに、しゅんと落ち込んでしまつた。

「雀耶さんのせいじやないよ。俺がついカツとなつただけだからさ」「ですが……」

「それに、今わかつ俺が起きるのを待つてくれたんでしょう？ なら、それでおあこひつてことだぞ」

「縁葉くん……はい、ありがとうござります」

「どういたしまして」

何故ここでいきなりお礼を言つのか分からず、言つた後顔を見合わせた俺達は笑いあつた。

「とにかく、雀耶さん」

「はい？」

一頻り笑つたところで、俺は訊ねてみた。

「昨日、さ、黒石と何を話してたの？」

事の発端を言えば、それだ。そこから今の状況になつた訳で、できればその内容が知りたい。

「それは……ですね」

訊ねた瞬間、笑っていた雀耶さんの顔が急に悲しげなものになつてしまつた。

「あ、いや、別に話したくないならいいんだけどさ」

やはりあんな表情をしていたほどだ、気軽に話せるよつまことじやないんだろう。

「……縁葉くん、一つ、聞いてもいいですか？」

雀耶さんが立ち止まつた。つられて俺も立ち止まる。

「なに？」

「……縁葉くんは、今がずっと続けば良いな、と思いませんか？」

今がずっと續けば？

「ど、どうこいつ意味？」

「そのままの意味です。わたしや竜華、そして他のクラスメイトの

皆さんと過ごす楽しい今という時間。これがいつまでも続いたとし  
ら、幸せではないでしょうか?」

「……」

な、何を言つて……

「暑すぎず寒すぎない、今といつ『秋』の時間……わたしは、緑葉  
くんと一緒に過ごしてみたいです」

「そ、雀耶……さん?」

言葉を紡ぐ雀耶さんの顔には、悲しげな表情が溢れている。  
いつたい、どうしたって言うんだ?

「……すみません、少々言ひ過ぎてしましました。緑葉くん、また  
明日です」

言い終えた途端、雀耶さんは走り出した。

「雀耶さん!/?」

急なことに足が動かず、走り去る雀耶さんをただ呆然て見送つてしまつた。

## 3rd day ? (後書き)

物語の本質となる言葉が出てきました。

今がずっと続けばいい

これが意味するのは、これから始まる一つの出来事の答えにして、

間違い。

さて、どうなることやら……

「……」

一人走り去った雀耶さんの後を追うように、俺は一人寮へて帰つていた。

雀耶さん……急に走り出したりして、昨日の逆みたいだな。  
しかし……今がずっと続けば、か。

ふと、今日の出来事を思い返してみる。

朝、早く出たことにより紀虎と出会つた。

珍しい名前の本を知り、紀虎の新たな一面を見た気がした。  
H R 前に、配当係として玄平と共に仕事をした。  
卒業後の話をしてくれたり、色々と助けられな  
昼休みは……竜華の謝罪と、弁当が……うん、これはあまり思  
い返さない方がいいな。

そして、放課後、雀耶さんと一緒に帰つて

今がずっと續けば良いな

今という、『秋』の時間が

「……」

なるほど、なんとなく分かつた。

暑すぎず寒すぎない。それもだけ冬になれば俺達3年生は受験生

としてそれぞれの道へ完全に進み始める。

受験の準備や公休などで全員が集まる時は少なくなり、それが終われば卒業式の練習……つまり卒業式がある。

それは高校生活の終わりで、それは皆とのお別れだ。

今みたいな事が終わる

今みたいな事はもう出来ない

今みたいな秋は、もう、来ない

ああ、そつか

「今が、ずっと續けばいいな

」

そうすれば、だって

「その願い、ちゃんと聞いたぜ」

「？」

前から声がした。

「今がいい、今が続けばいい、今とはマイコール」の季節。『秋』  
聞き覚えのある声の主が、向こうつから歩いてきた。

「黒石？」

「よつす、昨日の放課後ぶりだな」

「何言つてんだよ、今日学校で…」

いや、今日学校で黒石の姿を見てない。俺より前の席に座つてゐる  
から、目に入らない訳がないのに。

「俺、今日教室には入つてないからさ。わりと忙しくして授業時間  
も昼休みも全部費やしたんだよ」

そんなに大仕掛けなのか。

「……また、何かするのか？」

「おう、緑葉お待ちかねの、コレだ」

黒石は一冊のノートを見せた。それは先日書いていた小さなノート、  
雀耶さんの歓迎会だと思ってたやつだ。

「へえ、どんな事するんだ？」

「今緑葉が言つた感じのやつ」

俺が言つた？

「ま、それは起こつてからのお楽しみみてことで。始めるぜ」

黒石はポケットからペンを取り出した。

いつもサプライズを開始する時はアレを出して、宣言する。

「黒石 曜、おそらく今年最大にして最後のビックサプライズ！

題名は……そうだな……」

黒石がノートの表紙にペンを走らせる。そこに書かれたのは、例え  
るなら魔方陣と呼ぶべき形。

書き終えた途端、魔方陣が輝きだした。

「ちよ、ちょっと待てよー。せめて何をするかだけはちゃんと言つ  
てくれよー。」

「それ言つたらサプライズにならないだろ？」

「こうことは、まさかサプライズ仕掛けられるのって俺か！？」

「でも、ただ一つだけ言つなら、終わらせるには鍵を5つ集めるといいぜ」

「鍵？ 終わらせる？ やはり黒石の考へてることはよく分からない。」

「あ、そうだ、この題名が良いな」

思い付いたように魔方陣の上に文字が付け足された。

「それじゃ、始めようか

終わることなき続く今

変わることなく続く秋

今続き 続き秋

f a l l ~ c o d a ~ a u t u m n

3 s t   d a y f i n  
n e x t t o  
o r ?  
o r ?  
o r  
o r  
o r

三田田の終り、それと同時に、『秋』の始まりです。

勘の良い方ならすでに最後の文でどんな感じになるか分かつてしま  
うでしょうが、そうです、そんな感じに進みます。

予定としては、来月、12月、今年中には書き終えたいと思つてい  
ます。

そして、開始される12月までの間に、これまでの感想を頂けたら  
幸いです。

これを読んでくださったその貴方、何か一言残していきませんか？

それでは、

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9525w/>

---

fall ~ coda ~ autumn

2011年11月23日18時49分発行